ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.131

HR5.4 女性用ダンス用布製パーカ　ユピック・エスキモー　120×156cm
収集地：アラスカ／ベセル　2023年収集　ジュリア・ネヴァック (Julia Nevak)作
撮影：城野誠治氏（東京文化財研究所）

カスパック(中央ユピック語：qaspeq、英語：kuspuk)と呼ばれる布製のパーカである。ユピック・エスキモーの伝統的衣服であり、現在も日常生活の中で着用される。通常、女性用にはポケットがあるが、男性用には付けられない。本資料が収集された南西アラスカの中心都市であるベセルでは、毎年「カマーイ・ダンスフェスティバル（Cama-i Dance Festival）」という祭りが開かれ、世界中からダンサーが訪れる。本資料はダンス用として作られており、ふさ飾りが付けられている。

目次　Contents

1　表紙　女性用ダンス用布製パーカ
2-4　第37回北方民族文化シンポジウム網走「北方諸民族文化とジェンダー ２」
5　ロビー展「写真で振り返る日本のアラスカ調査3」
　／講座「アラスカ・ネルソン島の調査から」
6　ロビー展「北海道立北方民族博物館・東京文化財研究所共同研究展「文化財写真－北方民族の文化多様性を伝える」」
　／研修会「学芸員のための文化財写真研修会」
7　講座「ユネスコ世界遺産『北海道・北東北の縄文遺跡群』と北海道の縄文文化」
　／講座「北海道博物館紀行　美幌博物館」
8　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第37回北方民族文化シンポジウム網走

北方諸民族文化とジェンダー 2

2023.10.21（土）-22（日）

今年のシンポジウムは、昨年に続き、北方諸民族文化における伝統的なジェンダーの在り方やその歴史的変遷、現状と課題をテーマとしました。以下に各発表の概要を報告します。

＊　＊　＊

【第1部】北アメリカの事例（座長：佐藤円氏/大妻女子大学比較文化学部）

「20世紀初頭米国における先住民女性の政治力：オナイダ族女性の取り組みを例に」（地村みゆき氏/愛知大学経営学部）

これまでの研究では、ヨーロッパ系の人びとによるアメリカの「植民地化」や19世紀以降の先住民に対する文明化政策が、西洋的な家父長制、私有財産制、性別役割分業などの価値観を先住民社会に浸透させ、それ以前の先住民女性の社会的・政治的地位を低下させたとされてきた。しかし、必ずしもその論に当てはまらない事例も存在する。

本発表では、伝統的に女性の意見を重要視する母系制の氏族制度を取ってきたオナイダ族の女性、ローラ・コーネリアス･ケロッグを取り上げた。彼女のアメリカ･インディアン協会における活動、女性参政権運動における活動の考察を通じ、ケロッグがいかに主流社会のジェンダー規範と渡り合いながら、アメリカ社会および先住民社会において自らの地位を確立しようとしたかを明らかにした。

地村みゆき氏

「アメリカ都市先住民のジェンダーとセクシュアリティ：アメリカ先住民の都市化と女性・トゥースピリットの経験について」（大野あずさ氏/大阪経済大学経済学部）

本報告ではアメリカ先住民の都市化の歴史と都市先住民女性ならびにトゥースピリット（Two Spirit, アメリカ先住民LGBTQ＋の人々）の現状について、コロラド州デンバーの事例を基に検討した。はじめに、第二次世界大戦期以降に加速したアメリカ先住民の都市化について、特に先住民女性の都市移住の経験と彼女らが多様な部族出身者から成る都市先住民コミュニティで果たした役割について論じた。

次に、現代の都市アメリカ先住民女性とトゥースピリットの経験について、COVID-19の流行以降に顕著化した先住民ホームレス人口の増加、これに関連する貧困、薬物依存、家庭崩壊などに焦点を当てて論じた。

大野あずさ氏

【第2部】ロシアの事例（座長：岸上伸啓氏/国立民族学博物館）

「「我々は我々がすべきことをする」：ロシア・ヤクーチア西部のエベンキ共同体における資源採掘、労働とジェンダー」（ガリーナ ベロリュブスカヤ氏/カルガリー大学人類学・考古学部［カナダ］）

ロシア最大の連邦構成主体･サハ共和国（ヤクーチア）は、大規模な資源採掘と密接に関連してきた。これまでの研究で、資源採掘がいかに地域先住民社会の男性性と家父長的ジェンダー関係を助長するかが示されてきた。

本発表では、西部ミールヌィ郡に位置するシュルデュカル村を対象に、資源採掘が創出する労働空間やインフラの特徴、またこの空間が地域社会内部の特定のジェンダー関係をどのように規定しているのかを論じた。先住民エベンキが多数を占めるシュルデュカル村は、ソ連時代の資源開発によりトナカイ飼育経済を失ったが、それ以前の伝統的な移動生活、集団性、ジェンダー平等などに関する多くの物語を維持している。そして、現在の地域住民は、文化復興に自らの未来を見出している。彼らは資源採掘によって助長されたジェンダー不平等に打ち勝つべく、労働機会とジェンダーに配慮したインフラのために戦っている。

ガリーナ ベロリュブスカヤ氏

「先住民女性のエンパワーメント：ロシア・サハリン島のニブフの事例から」（ウラジスラワ ウラジミロワ氏/ウプサラ大学ロシア・ユーラシア研究所［スウェーデン］）

本発表では、先住民フェミニズムの知見とサハリンにおける調査から、現代ロシアのニブフ女性におけるエンパワーメント戦略とジェンダー平等について論じた。

先住民女性が置かれた状況に関する調査の結果、先住民共同体におけるニブフ女性のエンパワーメントや福祉は、行政機関における高い地位や経済的成功から必然的に形成されるものではないことが示された。ニブフ女性は、先住民の社会制度の変化、国家や国際的な権力構造により得られた機会と資源を利用し、エンパワーメントを実現しようとしていた。一方、ニブフが「社会発展の低い段階にいる」というソ連時代の知識は、現在のロシア社会にも引き継がれている。このことは、すべての先住民やその共同体が、同様の脆弱性を持ち、周縁化されていることを意味している。このような状況下では、先住民女性の教育や就業の機会、資本へのアクセスや政治的代表者になる機会を増加させても、発展的枠組みで定義されるジェンダー平等の実現は困難と考えられる。

ウラジスラワ ウラジミロワ氏

【第3部】モンゴルの事例（座長：呉人惠/北海道立北方民族博物館）

「モンゴル国カザフ人社会におけるジェンダーの形成と社会的役割」（廣田千恵子氏/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

本発表では、モンゴル国カザフ人社会を対象に、人びとが自らのジェンダーを認識していく過程、そして婚姻後の男女に課される社会的役割とその変容について報告した。

遊牧を文化基盤とし、父系制の社会構造をもつカザフ人は、外婚制の規則を今も維持する。20世紀に起きた二度の社会体制変容の影響で、婚姻形態や信仰意識には時代による違いが生じたが、カザフ人は現在も婚姻を経て社会的に男・女として認められる。男女に求められる主な社会的役割は家系を繋ぎ、家庭を築くことである。具体的には①子を産み育てる、②世帯間ネットワークを結ぶ、③生業上の性別役割を果たすことが期待される。その役割を果たせない場合、離婚、再婚、養子縁組、移住をおこなう。

こうしたジェンダー観は社会的に定着しているが、現在当該社会が直面している急激な経済変化は今後若い世代の考え方に影響を与えると考えられる。

廣田千恵子氏

「ジェンダーの視点からモンゴル文学を読む：近現代小説の中の＜女性像＞を中心に」（阿比留美帆氏/東京外国語大学）

かつて社会主義国だったモンゴルは、女性の教育水準や社会進出率が高く、今日でもアジアのなかではジェンダーギャップ指数のランキングで比較的上位の国である。一方で、社会主義以前の“伝統的”なジェンダー規範が社会や家庭内に根強く残るとも指摘されている。

本発表では、モンゴルのジェンダー観を知るアプローチとして、20世紀初頭から現代までのモンゴル文学作品を対象に、そこに描かれる＜女性像＞、特に＜妻＞の表象に焦点を当てて考察した。具体的には、モンゴル近代文学の創始者のひとりであるTs.ダムディンスレン（1908–86）、1950-60年代に活躍し歴史長編小説のジャンルを確立させたCh.ロドイダンバ（1917–70）、今日の若い読者を中心に人気の女性作家・詩人L.ウルズィートゥグス（1972–）らの小説をジェンダーの視点から読み解き、新たな解釈を試みた。

阿比留美帆氏

【第4部】アイヌの事例（座長：甲地利恵氏/北海道博物館）

「アイヌの英雄詞曲に見る女性像について」（林姝彣（りんしゅうえん）氏/北海道大学大学院文学院）

アイヌの英雄詞曲、および現実における女性像はどのくらい異なるのだろう。これまでの研究では、ヒロインが巫術で未来を予知し、癒しを行うなど重要な役割を果たすこ

とが明らかにされているが、物語の中で、女性に課された制約や抑圧について詳細に研究された例はない。

本発表では、金成マツが筆録した幌別地方の英雄詞曲のテキストを、フェミニズム批評の手法をもちい、特に物語内での女性の行動に対する「罰」の有無を基準として分析した。その結果、社会が現代女性に認めていることと、英雄詞曲の常識との間にズレがあることが示され、そのズレは、文学に組み込まれた女性に対する抑圧の反映と考えられた。類似したストーリーが異なる文学ジャンルに分類される場合、それらを比較、検討する必要がある。

林姝妛氏

「アイヌの人々が語る差別とジェンダー―アイヌ女性と和人女性の“生活世界”に注目して」（佐々木千夏氏/旭川市立大学短期大学部）

本発表ではアイヌ社会を生きる20～80代の女性たちへのインタビューを基に、彼女たちの被差別経験を読み解き、その差別構造を明らかにした。その際、アイヌの血筋にある女性だけでなく、結婚によってアイヌ社会に入ることになった和人女性にも注目した。

アイヌ女性の語りから、インターセクショナルな差別構造や高齢になるほど被差別経験を持つ割合が高いことが示された。被差別経験を持つ老年層のアイヌ女性たちは、「血を薄める」ために和人との結婚を望み、アイヌであることを公言しないなどエスニシティの隠蔽を行ってきた。

和人女性の場合、一般社会からは「アイヌ社会にいる女性」とラベリングされる一方、家族内ではアイヌの血筋ではないという意味で少数派となる。こうしたダブル・アウトサイダーとしての和人女性の苦悩も明らかにした。

佐々木千夏氏

なお、第4部では、コメンテーターの北原モコットゥナシ氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）に、お二人の発表について講評いただきました。

＊　＊　＊

シンポジウムの最後に、各発表者、座長による総合討論がおこなわれました。総合討論では、「ジェンダー研究に対するさまざまなアプローチを知ることができた」、「異なる地域・民族におけるジェンダーの共通点や相違点に関する認識を深めることができた」などを成果として挙げる声が聞かれました。

一方、「北方諸民族文化とジェンダー」に関連した研究の将来的な方向性としては、例えば「ジェンダーとマイノリティー」、「ジェンダーとエスニシティ」、「ジェンダーと宗教」など、よりテーマを絞り、ジェンダーと他の文化的あるいは社会的要素などを複合的に取り上げる視点が必要だろうとするコメントがありました。また、本シンポジウムの発表ではおもに女性におけるジェンダーの問題が取り上げられましたが、現状をより総合的に理解するためには、男性を対象としたジェンダーの研究がもっと必要ではないかという指摘もありました。

シンポジウム会場には、延べ22名の一般参加者にお越しいただきました。また、オンラインでの参加者は延べ75名でした。二日間の限られた時間でしたが、各発表に対しては一般参加者からも多くの質問やコメントが寄せられ、活発な討論がおこなわれました。

なお、シンポジウム関連事業として、10月4日（水）午後6時半より、オホーツク・文化交流センターで野花南によるコンサート「風紋の調べ～馬頭琴とサンドアート～」をおこないました。野花南は、馬頭琴・喉歌奏者の嵯峨治彦氏と、サンドアート・朗読担当の嵯峨孝子氏によるユニットで、昨年に続いての公演となりました。

モンゴルの伝統的な曲をはじめとしたさまざまな楽曲の演奏、馬頭琴の起源にまつわるモンゴルの民話をサンドアートで表現したパフォーマンス、そして恒例の喉歌教室など盛りだくさんの内容で、網走市や近隣市町村にお住まいの方を中心に242名の入場者がありました。

（学芸グループ　中田　篤）

野花南のお二人

ロビー展

写真で振り返る日本のアラスカ調査3

2023.11.3（金）-12.10（日）

主催：北海道立北方民族博物館

共催：北極域研究加速プロジェクトArCS II社会文化課題

当館元館長の岡田宏明、岡田淳子氏がアラスカ調査時に撮影した写真による写真展は今年で3回目を迎えました。文部科学省の補助事業として実施されている北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）の社会文化課題班は2020年～2021年にかけて、岡田夫妻が撮影した写真のデジタル化を行いました。今回はその中から、1962年～ 1980年の南西アラスカのネルソン島の調査写真を取りあげました。

会場の様子

ネルソン島はユピック・エスキモーの人々が長年に渡って暮らしてきた土地です。1962年に文化人類学者、岡正雄氏を代表とする明治大学第二次アラスカ学術調査団の一員として岡田宏明氏が調査を開始し、その後、岡田淳子氏と共に1980年まで断続的に調査が行われました。

写真展はネルソン島の概要を説明した後、岡田夫妻が調査を行った8つの集落と廃村ごとに写真と測量図面を紹介しました。今回の展示では岡田淳子氏に加え、岡田隊の一員として1974年の調査に参加した宮塚義人氏に協力いただき、写真の選定と現地の測量図面の製作を行っていただきました。写真は一枚ごとに岡田淳子氏がコメントを付けて下さいました。来館者は岡田氏によるコメントを注意深く読みながら写真を楽しまれていたようです。

（学芸グループ　野口泰弥）

「フランク･アマデウス氏(左) と岡正雄氏（1962年／ウムクミウト）」
（岡田淳子氏コメントより）

講座

アラスカ・ネルソン島の調査から

2023.9.3（日）10:00-11:30

講師　岡田淳子氏（当館元館長）

岡田淳子氏（左）

ロビー展に先行し、ネルソン島の調査について岡田淳子氏にお話していただきました。講座ではネルソン島各地の写真を振り返りながら、調査の概要とエピソードを紹介してくださいました。

ネルソン島のトヌナック近郊は長年にわたり人々が暮らしてきた地域です。遺跡になるということは人が住まなくなったということであり、いつどういう時に人々が移住を行ったかという問題が、遺跡を理解するのに重要です。

トヌナックの最も古い集落跡は3000年～ 2500年ほど前に使用されていました。時間は開きますが、その後、1800年代に使われていた集落跡があり、そこから1930年代～40年頃に使われた集落を経て、1940年代にはトヌナック川河口部に近いところに新たな集落が形成されました。岡田氏が調査を行った1970年代にはこの集落がまだ使われていましたが、最後の移住から40年近く経過しており、岡田氏は次の移住が近いという予測を立てました。今振り返ると、その予測は概ね当たっていたようです。

ユピック・エスキモーの集落には墓地が伴います。遺骨は通常、木で作られた墓に埋葬されました。墓地はにおいがしないように集落から見て風下に作られていました。

一方、かつては海難事故で亡くなり遺体が見つからない人のために人や動物、船などの形をした特別な標柱が集落に近い場所に立てられました。標柱の影が家に映る時には、亡くなった人が家に帰ってきたのだと考えられていました。つまり、非業の死を遂げた人を特別な形で葬っていたことが分かります。学生時代、エスキモーは墓を作らないと習ってきた岡田氏にとって、この地域の人々が、非常に手の込んだ墓を作って死者を葬ることは驚きであったと言います。

墓地に限らず、講座ではユピック・エスキモーの世界観を伺わせる具体的なエピソードを多くご紹介くださいました。現地の女性たちから大いに「モテた」という夫の宏明氏に関し、岡田氏が「あの人はまだ一羽もガンを捕ったことが無いからダメよ」と言ったら、女性一同が納得したというエピソードには会場が笑いに包まれました。

（学芸グループ　野口泰弥）

ロビー展

北海道立北方民族博物館・東京文化財研究所共同研究展

文化財写真
―北方民族の文化多様性を伝える

2023.11.3（金）-12.10（日）

主催：北海道立北方民族博物館　協力：東京文化財研究所

会場の様子

東京文化財研究所の協力を得て、当館所蔵資料27点を撮影した写真をB1サイズまで拡大し展示しました。

東京文化財研究所では、文化財は先人の築き上げた大切な遺産であり、これを保存し後世に伝えていく責務があるとして、アーカイブの構築に力をいれてこられました。現在ではテキストだけではなく、写真、音声、映像などの各種データ、成果物そのものなど、ありとあらゆるものが「アーカイブ」の対象として扱われており、なかでも写真は文化財アーカイブにおいてとりわけ大きな役割を果たしています。

令和4(2022)年より当館と東京文化財研究所では共同研究を実施し、考古・民族資料の何を、どう記録すると、文化財アーカイブの写真としてふさわしいのかを、検討してきました。

かつて博物館での写真撮影はフィルムカメラが主流で、当館でも数多くの写真をフィルムカメラで撮影してきました。平成12年頃から当館でもデジタルカメラを使うようになりましたが、その撮影方法はフィルムカメラ時代のやり方を踏襲していました。けれども実際には、フィルムカメラとデジタルカメラには様々な点で大きな違いがあるということを、共同研究を通して理解することができるようになりました。

今回のロビー展では、被写体である博物館資料の何を伝えたいのかを事前に話し合い、その討議に基づいて東京文化財研究所の城野誠治専門職員が撮影をおこないました。例えば蝦夷錦とよばれる絹織物では、織り込まれた龍の文様がうかびあがるように、緯糸に光をあてました。北海道アイヌのお盆では、複製作業にも役立つよう、文様が隅々までわかるようにするのはもちろんのこと、彫刻刀の動きにも注目しています。

今回の写真は、デジタルアーカイブ用の高精細画像を意識して撮影されたものになりますが、高精細画像をパソコン上でみる場合は、一度にはその一部しかみられません。ロビー展ではパネルにしてより明確にお見せできたことで、資料の全貌を観覧でき、高精細画像の効果をより引き出せたことが特徴になります。

被写体となった資料のなかには展示中のものもあったため、実物にも関心をもっていただけたようです。

（学芸グループ　笹倉いる美）

研修会

学芸員のための文化財写真研修会

2023.11.10（金）10:00-16:00

講師：江村知子氏（東京文化財研究所文化財情報資料部部長）
城野誠治氏（東京文化財研究所文化財情報資料部専門職員）
笹倉いる美（当館学芸主幹）

令和4(2022)年に引き続き、学芸員のための文化財写真研修会を開催しました。講師を務めてくださったお二人が所属する東京文化財研究所とは、文化財の記録作成手法等についての共同研究を行っており、研修会はその成果の一部を紹介するものでもあります。

今回の研修会は座学である午前の部と、実技を行う午後の部の構成としました。

午前の部では当館の笹倉が概要説明を行った後、東京文化財研究所文化財情報資料部部長江村知子氏が「文化財アーカイブの意義」というタイトルで、次に東京文化財研究所文化財情報資料部専門職員の城野誠治氏が「写真に記録すべきこと」というタイトルでお話をしました。

江村氏は東京文化財研究所がさまざまなデジタルアーカイブを構築されていることを紹介されました。また城野氏は、豊富な撮影例を示し、文化財写真をなりたたせる必要要件について説明されました。

午後の部は午前の座学の実践で、参加者が当館資料のなかから、それぞれ撮影したいものを選び、まずは自分なりに撮影し、次に城野氏の指導でライトの位置を変えて撮影しました。機材は同じであるにもかかわらず、ライティングに少し手を加えるだけで見違える写真になることを実感していただけました。撮影の技術に加え、対象を観察することの重要性に気づいたとの感想が寄せられました。

なお午前の部はオンラインも併用したため、全国各地からの参加者がありました。

（学芸グループ　笹倉いる美）

研修会（実技）の様子

講座

ユネスコ世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」と北海道の縄文文化

2023.11.5（土）10:00-11:30

講師：村本周三氏（北海道縄文世界遺産推進室主査）

村本周三氏

令和4年度に当館では、縄文遺跡を紹介する展覧会を開催しました（主催：北海道、北海道教育委員会）。その際、道東各地から集められた縄文土器を前に、観覧者から「道東にも縄文遺跡があるのですね」という驚きの声がきかれました。これを受け、改めて縄文遺跡について理解を深めていただこうと講座を企画し、北海道で縄文世界遺産を担当されている村本周三氏に講師を務めていただきました。

17の構成資産（遺跡）と、2つの関連資産（遺跡）から構成される北海道・北東北の縄文遺跡群は令和3（2021）年にユネスコの世界遺産に登録されています。

縄文時代は環境の差から6つの地域文化圏が存在しています。北海道・北東北の縄文遺跡群はそのうち、石狩低地帯から岩手及び秋田の県北より北の地域で、土器の形や、紋様、住居の形、儀礼などに共通性が見られます。当時の活動の広がりを、ヒスイやアオトラ石とよばれる緑色片岩の出土状況から紹介されました。新潟産のヒスイが北海道で見つかったり、日高産の緑色片岩「アオトラ石」で作られた石斧が本州から出土したりするそうです。北海道に生息していないイノシシの骨も北海道の縄文時代の遺跡からみつかるそうで、これは本州からもたらされたと考えられます。

北海道・北東北の縄文遺跡群は、北東アジアにおいて農耕、牧畜をせずに、狩猟・漁撈・採集で、環境変化に適応して定住化して暮らしを営んでいたことが世界遺産登録の際に評価されたといいます。その一方で村本氏は、世界遺産が例えば市町村の指定文化財より優れているということではなく、それぞれにおいて、役割や意味が異なっていることを強調されました。

世界遺産条約の精神は、国際協力による文化遺産の保護をとおして世界平和の実現に貢献するということです。世界遺産への理解を地域の文化財にも波及させることで、いまよりも少し優しい世界になることを願いたいとお話をしめくくられました。

（学芸グループ　笹倉いる美）

講座

北海道博物館紀行　美幌博物館

2023.11.18（土）10:00-11:30

講師：城坂結実氏（美幌博物館学芸員）

北海道博物館紀行は北海道内の魅力ある博物館を紹介するシリーズです。今回は多彩な活動で知られる美幌博物館を学芸員の城坂結実氏に紹介いただきました。

美幌博物館は美幌町に戸長役場が出来て100年目の昭和62（1987）年に開館しました。開館当初は美幌博物館と美幌農業館の二本立てでしたが、平成19（2007）年に美幌博物館に一本化され、このときに展示改修が行われました。そして今年再度のリニューアルが行われ、内容がアップデートされました。

城坂結実氏

もともとわかりやすいことでは定評のある展示に、さらに配慮が加えられました。今回のリニューアルでは、美幌町内を流れる川を主要なテーマにすえ、川を軸にした自然や人々の暮らしの紹介を充実させています。美幌博物館の所在地である美禽（みどり）も川に関係しています。エゾノウワミズザクラを意味するアイヌ語kikinに由来する木禽（ききん）川に橋が架けられたとき、飢饉を連想させるからと忌避した結果、美禽橋となり、この橋の名前から美禽という地名が産まれたそうです。実際にエゾノウワミズザクラが川岸に多くみられる様子をみせていただきました。他にも廃校になった学校のパネルを当時の給食を再現した模型とともに紹介するなど臨場感あふれるものになっています。

美幌博物館は調査研究や教育普及にも力をいれています。教育普及では学校との連携が特筆されます。学習指導要領と博物館活動をリンクさせ、利用しやすい体制を整えています。

城坂氏はご自身の専門である美幌の植物についても紹介されました。美幌博物館の後方に広がるみどりの森の植物を網羅した冊子の制作や美幌峠で発見した外来植物についてもふれられました。動画づくりでは自らナレーションを行っています。今後も調査や情報収集を続け、地域の魅力を発信されたいとのことです。

参加者からはぜひ新しくなった博物館の姿をみてみたいという感想がきかれました。

（学芸グループ　笹倉いる美）

ロビー展　オホーツクシリーズ17「北の状景から」

オホーツク地域の自然や文化的活動を紹介する展示イベント「オホーツクシリーズ」の17回目として、オホーツク地域の魅力を伝える写真作品を紹介します。

会期：令和6(2024)年1月4日(木)～1月21日(日)
会期中の休館日：1月9日、15日、22日、29日
会場：北海道立北方民族博物館・ロビー
観覧料：無料

「真冬の鷹」／2020年
撮影：山田　丈司

企画展「ユーコン・ファーストネーションの伝統的アート様式」

北アメリカ北西部を流れる大河ユーコン。この川の上流域、カナダ・ユーコン準州に暮らす先住民（ファーストネーション）の人びとは、厳しい自然環境を背景に、北太平洋や北極海の沿岸地域とは異なる独自の民族文化を発展させてきました。

本企画展では、ユーコン・ファーストネーションのアーティスト、ユクジーズ・ヴァン カンペン氏のアートコレクションおよび彼自身の作品により、ユーコン・ファーストネーションのアートの歴史、その多様性を紹介します。

会期：令和6(2024)年2月3日(土)～4月7日(日)
会期中の休館日：3月4日、11日、18日、25日、4月1日
会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室
観覧料：無料

関連事業：
「企画展講演会」
2024年2月3日（土）10:00-11:30
講師：U. ヴァン カンペン氏（通訳あり）

U. ヴァン カンペン氏

INFORMATION

行事報告

◆9月9日(土)、講習会「白樺樹皮でつくる小物」(講師：山辺朋子氏（白樺細工工芸家)）を実施しました。

山辺朋子氏

◆9月10日(土)、アイヌ文化講習会「イラクサの糸づくり」(講師：西田香代子氏：(アイヌ文化伝承者)）を開催しました。

糸づくりを解説する西田香代子氏（左）

◆9月16日(土)、はくぶつかんクラブ「バスケットづくり」(講師：塩谷舞解説員）を開催しました。

◆9月17日(日)、講座「特別展解説講座」(講師：笹倉いる美学芸主幹）を開催しました。

笹倉学芸主幹

◆10月7日(土)、はくぶつかんクラブ「白樺の皮で編むカードケース」(講師：平栗美紅解説員）を開催しました。

◆11月3日(金･祝)、第12回はくぶつかんまつりを開催しました。(協力:ポートアルバーニ・ファンクラブ、ネイパル北見、網走桂陽高校ボランティア部)

まつりで開催したモルック大会の様子

◆11月11日(土)、講座「文化財写真の魅力と役割」(講師：江村知子氏､城野誠治氏（東京文化財研究所)）を実施しました。

城野誠治氏（左)、江村知子氏（右）

報告

◆9月1日(金)、蔵書2340冊を寄贈されたことに対し当館元館長の岡田淳子氏に、北海道知事より感謝状が贈呈されました。

北方民族博物館だより
No.131
令和5年(2023年) 12月22日発行
編集･発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会